

読書

後藤新平の台湾

渡辺 利夫著

台湾の李登輝元総統は、明治時代に台湾総督として赴任した後藤新平を高く評価した。台湾の基礎的インフラを整備した後藤の持ち味は、明確な開発目的意識と強力なリーダーシップだった。

著者はその後藤に焦点を当



中公選書
定価1760円

くり上げないと国際情勢の荒波にのみ込まれかねないとの危機感が後藤の背中を押していた。明治の人間のすがすがしさは、自身の立身出世というより崖っぷちに立つ国家そのものを何としても支えようとした心情の発露の中にあるように思う。

人心掌握を用いて発展促す

く、誰もが行きたがらない土地に近代化のくさびを打ち込んだのが後藤だったと著者は指摘する。台湾統治でいかに後藤らしいやり方は、土匪の扱いにあった。植民地化を急ぐ西洋列強は、こうした土匪は有無を言わせぬ

て、初代満鉄総裁や外務大臣まで務めたその生涯の中で最も輝いていたのが台湾総督府時代だったと結論付ける。牙を研ぐ列強の中で、早急に近代国家をつ

後藤もそうした人物だった。なお、台湾は今でこそ観光地として称賛を浴びるものの、当時はペストやコレラ、マラリアなどが蔓延する瘴癘の地として恐れられていた土地だった。また、至る所で土匪が跳梁跋扈するなど治安状況も悪かった。そうした衛生も治安も悪

力ずくの武力で潰していったが、後藤は違った。

後藤は土匪の頭が部下だった人間を連れて帰順すると、道路建設などに彼らを使った。土匪はあちこちで略奪行為を働いたが、それはそうしないと生きていけなかったのだ。後藤は彼らが略奪しなくてもいいように暮らしていけるようにした。

こうした事業を通じて、台湾の治安が平常に戻り民心が安定すると、インフラ整備などにも台湾経済は急速に発展した。腕力で侵略統治するのではなく、人心をからめ捕る後藤の日本の手法は、強権統治の中国と対比しても違いが鮮明で、本書が示唆するものは大きい。

池永達夫